

『かたいつぽうの靴下が……』

(一一六)

〈原作〉

『—子どもの権利条約童話—
月と太陽と子どもたち』(原子修
著)より

〈脚色〉

原子 修

《第一場》

(空から のどかなトビの声)

(明るい音楽)

ノルちゃん

(両手にまっしろい靴下をもって 踊りながら歌う)

ぼくの大事な靴下さん

遠い国のお友達からいただいた

ぼくの大事な靴下さん

これをはけば

地雷をふまないですむという

ふしぎなふしぎな靴下さん

今日まで

ぼくが

地雷をふまないですんだのも

靴下さんのおかげです

ありがとうございます

ありがとうございます

ぼくの大事な靴下さん

(靴下を物干竿にかけ 両手をあわせて靴下を拝み 歌い踊る)

ぼくの大事な靴下さん

小川の水でじゃぶじゃぶ洗った

ぼくの大事な靴下さん

早くきれいにかわいて下さい

お陽さまの光をすって

風さんのたすけをかりて

早くきれいにかわいて下さい

そして

これから

ぼくが地雷をふまないですむように

しつかり

ぼくの両足を守って下さい

おねがいです

おねがいです

ぼくの大事な靴下さん

(歌い踊りおわったノルちゃん 竹馬で遊びはじめる)

(遠くで砲声)

ノルちゃん

(遊びやめ)

あ 大砲だ また おそろしいいくさが はじまったんだ

(砲声 だんだん接近してくる)

ノルちゃん

— (竹馬からおりて 空を見上げ) いくさって いやだなあ 道も野原も うずめられた地雷でいっぱいだし

— おまけに 大砲の弾までが……

(突然 不吉な音楽)

(すぐ近くで 迫撃砲の発射音)

(あたり一带をおおう大閃光 爆発音 火柱 土煙)

(ノルちゃんの悲鳴 高く 鋭く)

(溶暗)

(スポットの中を かたいつぼうの靴下が ひらひらと 光の帯のように 美しく 宙に舞う)

(悲痛な音楽)

ナレーターの声

いつも 水田ではたらくおじいちゃんやおかあさんの留守を たった一人でしっかり守っていたノルちゃんに どこからともなく飛んできた迫撃砲の弾が命中したのです 火の柱は噴水のように盛りあがり 土煙は息絶えたノルちゃんの 血まみれのからだを もうもうと おおいかくしました

(暗転)

ナレーターの声

そして はげしい爆風が 物干竿を 嵐のように吹きとばしたとき ノルちゃんのかたいつぼうの靴下だけが 風につって ひらりと 空に舞いあがったのです

《第二場》

(明転)

かたいつぼうの靴下

(ひらひらと舞いながら 泣いて)

かわいそうなノルちゃん でも もう ぼくを足にはいてくれるノルちゃんは この世にいない ああああ

あ ノルちゃんやーい

(泣く)

(ひゅうひゅうひゅうという風の音楽)

(風が 光の潮のように 吹きおこる)

風

(ガラスの服の ガラスの帽子の ガラスのマフラー姿で 風の音楽にのりながら 靴下に近づき)

おや かたいつぼうの靴下さん どうして 泣いているの？

あ 風さん

(身をよじって泣き)

ノルちゃんが……ノルちゃんが……

風

(ガラスの指で 靴下をひよいとつまみあげ さつと急上昇して 空のたかみに舞いあがり)

ノルちゃんが どうしたの？

(泣きながら)

だれかが 五つになったばかりのノルちゃんに 迫撃砲の弾を撃ちこんだのです ああ かわいいそうなノル

ちゃん！

えっ ノルちゃんに 迫撃砲の弾を？

(靴下をつかんだまま 虚空をくるくるまわり 泣いて)

どうして？ どうして？ どうして？

(ねじれそうになりながら 泣いて)

どうして？ どうして？ どうして？

かわいそうに かわいそうに かわいそうに

かたいつぼうの靴下

風

かたいつぼうの靴下

風

かたいっぽうの靴下

風

かたいっぽうの靴下

かわいそうに かわいそうに かわいそうに

(くるくる まわり)

あああああ 目がまわったよお

(くるくる まわり)

あああああ 目がまわったよお

(風 まわりつかれて

靴下をはなし どこかに すっと消えていく)

(青い溶暗)

(青い光の中を ねじれたまま 落ちていく靴下)

(音楽)

(すこしずつ地上に落ちていく靴下)

ナレーターの声

どうして あの クルミの実のような目をしたノルちゃんが 命を奪われなければならないのでしょうか

そう思えば思うほど やりきれなくなつて 風は くるくるくるくる まわりました まわつて まわつて

とうとう 目がまわつた風は かたいっぽうの靴下をはなすと すっと どこかに消えていってしまいました

た

ぼくを 宝物のように 大切にしてくれた ノルちゃんやーい (エコーで)

かたいっぽうの靴下

(暗転)

ナレーターの声

ひとりぼっちになった かたいっぽうの靴下は ねじれた一筋のまっしろい雲のように 宙にうかびました

でも じぶんじしんでは 空にうかんでいることのできない靴下は みるみる 下へと落ちはじめ 青黒い

水をたたえた沼に 沈もうとしたのです

《第二場》

(バサバサツという羽音)

(明転)

あわてんぼうのワシ

(空の上から 靴下をみつけ)

おや 沼に沈もうとしている あ白いものは 蛇かな？ それとも 魚かな？

(ひゅうと 大気を切る羽音)

(ワシ 鋭い爪をひらいて舞いおり 靴下をひつつかむと 水面すれすれに バサツと羽根をうち さつと 空に舞いあがる)

(大気を切り裂いてとぶワシ)

(靴下 ジェット機の飛行機雲のように しろくたなびく)

(ジェット機の音楽)

(リズムカルで スピーディな音楽)

かたいつぼうの靴下

(泣声で)

ほくを いつも 洗濯してくれていた やさしいノルちゃんやーい

(ワシが羽根をうつバサバサツという音)

(ワシと靴下 曲芸飛行のように 宙を旋回し ぐるぐる 飛びまわる)

(やがて 崖の上の巣にたどりついたワシ くちばしで 靴下にさわる)

あわてんぼうのワシ

おやつ おいしい蛇か いきのいい魚かと思ったのに なんだい これは ペラペラの 布の切れっぱし
じゃあないか ちえっ この 役たたずめ！

(ワシ 靴下を 巣からつまみだす)

(落下の音楽)

(靴下 ぐったりとしよげかえり 下へ下へと 落ちていく)
かたいつぼうの靴下
(泣きながら)

ああ ノルちゃんなしには ぼくは 役たたずの よれよれの布きれに すぎないんだ
ああ いつも ぼくを大事にはいていてくれたノルちゃんやーい

(落下の音楽)

(溶暗)

(スポットの中を ゆらゆらと落ちていく靴下)

(暗転)

(なにかにぶつかった感じの音楽)

ナレーターの声

とうとう ワシの巣からつまみだされた かたいつぼうの靴下は 泣く泣く 下へと落ちていきました
して とうとう 崖の下にはえていた松の木の枝に ひっかかってしまいました

《第四場》

(ざわざわする雑踏の音)

(交錯する人声)

(明転)

(松の木の枝から 力なくたれさがる靴下)

(それを見て 人々 たちどまる)

男1

(靴下を指さし)

なんだい あれは

女1

(靴下を指さし)

かたいつぼうの靴下じゃあ ないか

男2

(靴下を指さし)

かたいつぼうの靴下じゃあ 仕様がない

女2

(靴下を指さし)

ちえつ 雑布にもなりやしない

修
男1 男2

(靴下を指さし)

役だたずの靴下め!

子
女1 女2

(靴下を指さし)

用なしの靴下め!

原
男1 男2 女1 女2

(靴下を指さし)

かたいつぼうの靴下め!

(長い竹を数本かついだ)

竹売りのおじいちゃん 通りかかる)

竹売りのおじいちゃん

(節をつけて 声をはりあげ)

竹 竹

ほそくて ながくて しなやかな

竹は いらんかあ

(たちどまり 人ごみを見 また あるきだし 大声で 節をつけ)

竹 竹 竹

ほそくて ながくて しなやかな

竹は いらんかあ

(通りすぎようとした竹売りのおじいちゃんの肩の いちばん長い竹の先が 靴下を ひょいとひっかけ そのまま 旗のように ひらひらさせて すすむ)

竹売りのおじいちゃん

(靴下には気づかず 大声で 節をつけ)

竹 竹 竹

ほそくて ながくて しなやかな

竹は いらんかあ

男 1 男 2

(手をふりながら 後についてすすみ 竹売りのおじいちゃんの口調をまねて 節をつけ はやしたて)

靴下 靴下

ほそくて ながくて しなやかな

かたいっぽうの靴下は

いらんかあ

はしっこい犬

(竹売りにじゃれついて)

ワン ワン ワン

女 1 女 2

(手をふりながら 後についてすすみ 竹売りの口調をまねて 節をつけ はやしたて)

靴下 靴下

ほそくて ながくて しなやかな

かたいっぽうの靴下は

はしっこい犬

いらんかあ
(ますます 竹売りにじゃれついて)

ワン ワン ワン

竹売りのおじいちゃん

(まとわりつく犬を はらいのけようとして)

これ これ これ

(危急の音楽)

ナレーターの声

あつ 竹売りのおじいちゃん 足元に きのはげしい撃ちあいのできた 砲弾の穴が ありますよ!

竹売りのおじいちゃん

(足元を見 おもわず よろけて)

うわあ 砲弾が炸裂したあとの 大きな穴だあ

(竹売り ころびそうになる 竹の先が 地面すれすれになり 靴下が 犬の鼻先で ゆらゆらする)

はしっこい犬

(靴下をくわえ 反対側にはしりだし)

ワン ワン ワン

修 原 子

(溶暗)

(疾走の音楽)

(スポットの中をはしる犬)

(犬の口から しろい吹きながしのようにたなびく靴下)

はしっこい犬

(歌って)

じゃれ雪 じゃれ雲

ワン ワン ワン

かたいっぽうの靴下だけで

かたいつぼうの靴下

(暗転)

ナレーターの声

(沈黙)

はしっこい犬

(明転)

おばあちゃん

ひゅう ひゅう ひゅう

(泣き声で)

ああ ノルちゃん

ぼくを ひとりぼっちにして どこに行ってしまったのお

はしっこい犬にくわえられた かたいつぼうの靴下は まっしろい吹きながしのよう
に ひらひら たなび
きながらも やっぱり ノルちゃんのことを 思っていたのです

そして その間にも はしっこい犬は はしって はしって はしりぬき やつと
おばあちゃんの小屋に
たどりついたのです

《第五場》

(歌うように)

おばあちゃん おばあちゃん

かたいつぼうの靴下ですよ

ワン ワン ワン

(はしりつかれた犬の首を やさしく だきしめ)

ありがとう ありがとう

— きょうは これを 道ばたの市場で売って わたしたちの食べものを 買うとしよう

(おばあちゃん はしっこい犬から 靴下をうけとり 大切そうにおしただいて ふかぶかと 拝む)

(犬も 靴下を 拝む)

(靴下も おばあちゃんを拝み 犬を拝む)

おばあちゃん (やさしく 犬の頭をなで)

じゃあ 道ばたの市場に行くからねえ 小屋で お留守番を おねがいますよ

はしっこい犬 (尾をふって)

はいはい おばあちゃん

しっかり お留守番しますから

行ってらっしゃい おばあちゃん

ワン ワン ワン

(とことこ 歩行の音楽)

(溶暗)

おばあちゃん (スポットの中を とことこ 歩きながら 歌う)

かたいっぽうの靴下だって

きつと

なにかの役にたつ

かたいっぽうの靴下だって

きつと

いつかは役にたつ

かたいつぼうの靴下

雪のようにまっしろい靴下

洗いたてのきれいな靴下

(おばあちゃんの手の中で スポットを浴び 歌う)

ありがとう おばあちゃん

ぼくは

ふしぎな靴下なのです

ぼくをはいていれば

地雷をふまないですむのです

どうか おばあちゃん

ぼくを

みすてないてください

ぼくを

だれかの役にたつ靴下にしてください

おねがいます

おばあちゃん

(がやがやと市場の声)

(物売りのにぎやかな声)

(明転)

おばあちゃん

さあ 道ばたの市場に着いたよ

(靴下をひらひら振り 大声で節をつけ)

男3

おばあちゃん

女3

おばあちゃん

男4

女4

さあさあ

買っておくれ

かたいっぽうでも

とつても役にたつ

雪のようにまっしろい靴下だよ

さあ さあ

買っておくれ

(靴下を指さし)

なーんだ

かたいっぽうしか ないじゃあないか

(靴下をかかげ)

かたいっぽうでも とつても役にたつ靴下なんだよ

(靴下を指さし)

いったい 何の役にたつと いうの？

(靴下をかかげ)

これをはけば 地雷をふまないで すむのさ

(せせら笑って)

じゃあ もう一本の足は どうなるんだい？

(嘲笑して)

もう一本の足は 地雷でふっとんでしまっても いいのかい？

おばあちゃん

(靴下をかかげ 片足を前にだし 別の足をそれにそろえ また 片足を前にだして あるいてみせ)

男3 男4

(声をあわせて 笑い)

そんな のろのろ歩きじゃあ 家に帰りつくまえに 日が暮れちゃうよ

女3 女4

(声をあわせて 笑い)

日が暮れて 道に迷って 家に帰りつけなくなっちゃうよ

男3 男4 女3 女4

ハッハッハッハッハ

(笑って たちさる)

(溶暗)

(さびしい音楽 美しく流れる)

おばあちゃん

(スポットの中で ひらひらと靴下をふり 歌う)

さあさあ

買っておくれ

かたいつぼうでも

とつても役にたつ

雲のようにまっしろい靴下だよ

さあ さあ

買っておくれ

(音楽たかまり また 低くなる)

さあ さあ

買っておくれ

かたいっぽうでも

地雷よけになる

とつてもとつてもふしぎな靴下だよ

さあ さあ

買っておくれ

やさしいところの靴下だよ

きれいなところの靴下だよ

修
(音楽 たかまる)

(暗転)

ナレーターの声

道ばたの市場にたつて おばあちゃんは 何時間も 何時間も かたいっぽうの靴下を ひらひらと 美しい雲のようにふって 歌いました

かたいっぽうの靴下だつて きつと ほしいひとがいるにちがいない と おばあちゃんは 固く信じていたのです

(危急の音楽)

ナレーターの声

あつ いたずら好きの男の子が さつと おばあちゃんの手から かたいっぽうの靴下をうばいとつて 逃げていく!

(沈黙)

《第六場》

男の子の声

(明転)

男の子

(急迫の音楽)

かたいつぼうの靴下

男の子

かたいつぼうの靴下

男の子

かたいつぼうの靴下

男の子

やーい かたいつぼうの靴下だーい

(靴下をたなびかせて 走りながら)

やーい 田んぼのカカシに 売りつけてやるよお

(絶叫して)

やめて! やめて! やめて!

(ぐるぐる はしりまわり)

だって あれほど おぼあちゃんが がんばっても だーれも買ってくれないんだから 仕方ないよ

(必死に)

あつ 道ばたの草むらに入らないで!

地雷がうめられている!

(かまわず はしりまわり)

この靴下さえあれば 地雷をふまずに すむんだらう?

(必死に)

ぼくを どつちかの足に ちゃんと はいて いつも その足を先にして あるかなくっちゃあ!

(走りまわりながら)

ちえっ そんなの 面倒くさいや

かたいつぼうの靴下

(必死に)

あつ そこは危ない！ 草むらのかげに 地雷がうめられている！

男の子

(平気ではしりまわり)

やーい 田んぼのカカシやーい

かたいつぼうの靴下を買わないかい

かたいつぼうの靴下

(絶叫して)

ノルちゃん！

(地雷の炸裂音)

(火と土煙り 男の子をのみこむ)

(靴下 はげしい爆風にあおられ ひらりと 空に舞いあがる)

かたいつぼうの靴下

(泣きながら)

ああああ ノルちゃんが 今度は 地雷にふれて 死んじやったあ

(ゆっくと 下に落ちはじめ)

(空が 金いろにそまりはじめる)

ナレーターの声

いたずら好きの男の子が 田んぼの近くの草むらにはしりこんだとき 足は たしかに 地面からちよつぴり顔をだしていた金属の突起にふれたのです

地雷です

いくさに狂った人々が ところかまわず埋めていった おそろしい地雷に 男の子の はだしの足が ふれてしまったのです

(悲痛な音楽)

(空の金いろに 薔薇いろがとけあつて 美しい夕焼け)

(舞台は しだいに逆光の中に入っていく)

かたいつぼうの靴下

(泣きながら)

ノルちゃん

ナレーターの声

かたいつぼうの靴下は 地雷だらけの草むらへと ひらひら落ちていきながら 身をよじって泣きました
地雷で息絶えた男の子も また あの 迫撃砲の弾にあたって死んだノルちゃんと同じ男の子のように思え
て 仕方なかったのです

そのまには 空では お陽さまが ゆらりと 西の空にしずもうとしていたのです

(金いろの太陽 まばゆく 姿をあらわす)

(夕焼けの美しい音楽)

かたいつぼうの靴下

(夕陽にキラキラ光りながら)

お陽さま お陽さま

いまにも 地平線の彼方に沈もうとしている お陽さま

ほくは いま おそろしい地雷でいつぱいの草むらに 落ちていきます

でも お陽さま

どうか ほくを もう一度 だれかの役にたてる靴下にしてください

おねがいです お陽さま

(夕焼けの美しい音楽 さらに高まる)

(夕陽 ますます大きく輝きわたる)

ナレーターの声

— 西の空のはずれで さいごの光を いっしょうけんめいにもやしていた太陽が どうして かたいつぼうの

太陽

靴下のねがいを ききもらしたり致しましょう
いくさですっかり荒れはてた野を 心から悲しんでいた太陽は いまにも 地雷だらけの草むらにせずもう
とする かたいっぽうの靴下に そっと 声をかけたのでした
もう一人のノルちゃんが 待っているよ(エコーで)

(太陽の口から キラキラと 金いろに光りかがやく風が吹きおこり 草の葉むらにせずもうとした靴下を すきとおった金いろの
指ですくいあげ ひらりと虚空にうかべ ゆったりと 空の高みにつれていく)

(靴下も 太陽風にそまつて 夕焼け雲のように もえる)

(太陽風につれられて 野をこえ 丘をこえ 小さな村の上空まで ながれていく靴下)

(その間 夕焼けの美しい音楽)

ナレーターの声

お陽さまの口から吹きおこった太陽風は 草むらにせずもうとした かたいっぽうの靴下を すきとおった
金いろの指ですくい上げ ひらりと 虚空にうかべました そのまま 空のたかみへ ひらひらと 連れて
いったのです

太陽

太陽風の いつくしみぶかい息にそまつた かたいっぽうの靴下の まっしろいからだは 夕焼け雲のよう
に 美しくもえました 野をこえ 丘をこえて 見も知らぬ小さな村の上まで ながれていきました
さあ もう一人のノルちゃんのとこりに 行っておあげ(エコーで)

(村はずれの まずしい小屋のまえに 松葉杖の少年がたち じつと 空を見上げています)

(靴下 キラキラ光りながら 松葉杖の少年の方へと しずかに おりていく)

松葉杖の少年

(靴下を指さし)

あつ 夕焼け雲が おりてくる
金いろの光にそまつた 美しい雲が おりてくる

(夕焼けの美しい音楽)

(靴下 ゆっくりとおりにきて 松葉杖の少年のさしのべた手に おさまる)

(音楽 高潮)

(夕陽 地平線にしずみかける)

(逆光をあびてたつ少年と 手の中のかたいっぽうの靴下)

太陽

(夕焼けの光 全天にもえる)

(夕陽 すっかり沈む)

(高潮する音楽)

ナレーターの声

ぼくの かたいっぽうしかない足を やさしく包んであげようとして かたいっぽうの靴下のかたちをした雲が おりてくる ぼくの かたいっぽうしかない足を べつの地雷から守ってあげようとして かたいっぽうのかたちをした愛が おりてくる

— じゃあ 仲よくねー(エコーで)

松葉杖の少年は 小川に魚をとりにいこうとして 土手にうめられた地雷にふれ 命だけは助かったものの片足をふきとばされてしまったのです
いまも 松葉杖をつかって くらしていたのです
かたいっぽうの靴下が かたいっぽうの足しかない少年の手に しっかりとうけとめられるのをみとどけると 太陽は ゆったりと 西の地平線に 姿をけしました 空が 美しい夕焼けの光に もえています 世界中の 地雷にふれて傷ついた たくさんの子どもたちを そっと抱きしめるかのように 夕焼けの光は 降って 降って 降りしきったのです

(夕焼けの光と音楽 最高潮に達する)

(解説)

「子どもの権利条約」の第二三条は、「障害児」についてです。地雷でかたいっぼうの足を失った子どもにも、しあわせに生きていく権利はあります。

(二四八)

(幕)